3/16 2015

Japan Music Education Society News Letter

第59号 No. 59

日本音楽教育学会ニュースレター

目　次

1　学会からのお知らせ

1-1 第 46 回大会のご案内 …… 2
1-2 第 13 回音楽教育ゼミナールのご案内 …… 2
1-3 学会の動向 …… 3

2　委員会からのお知らせ

2-1 選挙管理委員会 …… 3
2-2 編集委員会 …… 4
2-3 学会誌のあり方に関する検討委員会 …… 4

3　音楽教育の窓

3-1 〈連載〉音楽・教育・学校（3）
自分史と音楽教育――戦後 70 年を振り返る―― …… 5

4　会員の声

4-1 号泣する準備はできていなかった …… 6
4-2 ハンガリー国営 TV 制作ドキュメンタリー番組
「五音階の国・核――福島コダーイ合唱団――」 …… 6

5　新刊紹介

5-1 『小学校音楽映像指導資料
楽しく実践できる音楽づくり授業ガイド』 …… 8

6　報告

6-1 平成 26 年度第４回常任理事会 …… 9
6-2 平成 26 年度第４回編集委員会 …… 12
6-3 会計報告 …… 12

7　事務局より …… 14
編集後記

１ 学会からのお知らせ

1-1 第46回大会のご案内

大会実行委員会委員長　菅　裕

日本音楽教育学会第 46 回大会が 2015 年 10 月３日（土）及び 10 月４日（日）に宮崎市で開催されます。昨年 12 月に実行委員会を立ち上げ，現在準備を進めているところです。会場となる宮崎市シーガイアコンベンションセンターは，広大な松林の緑に囲まれ，正面には太平洋が広がるリゾート地にあります。都会の喧騒を離れ，美しい自然の中で音楽教育についてじっくりと考える大会にしたいと考えております。ぜひ多数の学会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

すでにインターネット上に大会サイトを立ち上げております。今後，学会のコンテンツや会場へのアクセス方法，周辺の観光情報などを掲載していきますので，ぜひ一度お目通しください。

大会 HP　☞　http://www.cc.miyazaki-u.ac.jp/e05107u/JMES/index.html

1-2 第 13 回音楽教育ゼミナールのご案内

常任理事　佐野　靖
常任理事　水戸　博道

平成27年度の第13回音楽教育ゼミナール（以下，「白金（しろかね）ゼミナール」）は，下記の要領で開催されます。ふるってご参加くださるようお願い申し上げます。なお，白金ゼミナールのホームページの開設は，３月下旬を予定しております。プログラムの趣旨や概要，ならびに申込み手続きなど，ゼミナールに関するさまざまな情報を発信して参ります。

テーマ：実践研究をどう論文にまとめるか
◆開催日： 2015 年８月 29 日（土）・30 日（日）
◆会　場：明治学院大学白金校舎アートホール

第 13 回音楽教育ゼミナールとなる白金ゼミナールのテーマは，「実践研究をどう論文にまとめるか」です。これまで，第 11 回の神田ゼミナールでは，リサーチクエスチョンの立て方やそれに適合した方法論の探し方を学び，続く第 12 回の立教ゼミナールの「最先端の授業研究を学ぼう！」では，外部講師のレクチャー，ディスカッションやグループワークを取り入れた音楽科授業研究の実践を通して，実践研究にのぞむ基本的なスタンスや質的方法の重要性などをあらためて確認することができました。

テーマ「実践研究をどう論文にまとめるか」は，そうした第 11 回，第 12 回の実践研究の方法論追究の流れを引き継いだものです。実践現場をどう記述，分析し，研究論文としてまとめていくかという難題に切り込みます。

いうまでもなく，授業研究をはじめとするさまざまな実践研究においてどのように理論を生成，構築していくかという問題は，簡単に一定の結論を導き出せるものではありません。むしろやればやるほど，新たな課題が現れてきます。それほど実践研究には奥行きがあるともいえますし，そこに実践研究の面白さがあるのではないでしょうか。

若手には若手の，ベテランにはベテランの悩みや課題があります。ゼミナールという場で，みんなで一緒に悩み，考え，議論を深めたいと思います。

1-3 学会の動向

日本音楽教育学会会長　小川　容子

会長諮問プロジェクトについて

「会長諮問プロジェクト」の会議を２回（12 月 28 日，２月 22 日）おこないました。メンバーは，小川，伊野副会長，本多事務局長と常任理事の加藤，嶋田，北山，水戸，佐野（敬称略）の計８名です。プロジェクトでは，①学校教育現場で「教科音楽」によって培われた力（＝授業で学んだ力）を具体的なデータとして示すこと，②研究者・教育者としての良心と良識にもとづいて，信憑性のある実証的データを示すこと，③プロジェクトメンバーが先行して発信すること，④会員への協力参加をよびかけると共に，教育現場の実践データに基づいた具体物としての完成をめざすことについて議論を重ねております。

なお，②に関しては，具体的な方向が見えてきましたので，少し先行してこの場を借りて報告いたします。昨年度末から今年度にかけて，音楽活動が盛んな小学校児童を対象に，質問紙調査（予備調査）をおこないました。学校長や主任・音楽担当の先生方のご協力のもと，300 人強のデータ（１人＝A4 版４枚の質問紙）が，２月末現在，続々と集まっております。一生懸命に書かれた子供達の文字からは，音楽に対する熱い思いがひしひしと感じられ，これらを丁寧にひろいあげながら教科音楽の重要性をピーアールしたいと，一同，張り切っております。これらのデータの集計・分析後に質問項目を再調整し，５月以降，小中学校の児童生徒を対象とした 1000 人規模の本調査へと拡大するつもりです。本調査では，会員の皆様にもご協力をいただくことになろうかと思います。本調査の結果は，年内にも，関連学会等との合同シンポジウムで公開できればと考えております。

この他，座談会，授業観察や先生方へのインタビューの実施，授業実践の収録，年次大会での公開等を計画しております。会員の皆様からのさまざまなアイデアをもとに，社会に還元できる具体物を作成したい，教科音楽の意義や貴重な研究成果をより広く発信していきたいと考えております。ニュースレターはもとより，ホームページ等でも，引き続き情報発信をしていきますので，ご覧になってください。

２ 委員会からのお知らせ

2-1 選挙管理委員会

選挙管理委員会委員長　志民　一成

今年度４月に第 22 期選挙管理委員として，駒久美子，高橋雅子，寺田己保子，宮本憲二，志民一成の５名が小川容子会長から委嘱を受け，同委員会が発足しました。２月 11 日に第１回委員会を開催し，互選により志民が委員長，駒委員が副委員長に選出されました。また，第 21 期委員会からの引き継ぎ事項を確認しながら，来年度の選挙にむけて作業内容や日程を検討しました。

2015 年６月に実施されます「第 22 期日本音楽教育学会会長・理事選挙」は，日本音楽教育学会ホームページに掲載されている会則，細則，選挙管理委員会規定，会長・理事選挙実施要領に則って実施されます。今後の日程ですが，まず５月末日に学会費納入状況から選挙人名簿を確定し，６月中旬に投票用紙を含む選挙関連書類を郵送させていただきます。選挙実施方法の詳細につきましては，選挙関連書類中の選挙公報でお知らせします。選挙についてご不明な点がございましたら，選挙管理委員会（学会事務局内 E-mail:onkyoiku@remus.dti.ne.jp）までお問い合わせください。

会員各位の見識ある投票により，学会のさらなる発展のためにふさわしい会長・理事が選出されますよう期待します。そのために選挙管理委員会では，公正かつ正確な選挙事務を遂行できるよう努めてまいりますので，皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

2-2 編集委員会

編集委員会委員長　永岡　都

平成26年度最後のお知らせとなりました。『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』各２冊,計４冊の学会誌を無事発刊して安堵するとともに,この１年は,２つの学会誌が研究成果の発表,情報発信,会員相互の交流の場としてこれまで以上に活性化し,1500名を超える会員一人一人にとってさらに有意義なものとなるにはどうしたらよいか,考え続ける日々でもありました。

次年度の編集は,『音楽教育学』第45巻第１号から始まりますが,この号は「音楽科へのエール」と題して関連学会の方々からもご寄稿いただく予定です。音楽科の意義について内外に発信していければと思います。また,次号『音楽教育実践ジャーナル』vol.13no.１の特集「これまでに音楽科が果たしてきた役割,これから音楽科が担うべき役割」では,過去・現在・未来と続く時間軸の中で音楽科の役割を再考しつつ,授業の実践報告なども充実させたいと考えております。締切日の変更にもかかわらず,多数のご投稿をいただき,ありがとうございました。

学会誌は会員の皆様の投稿によって成り立っています。近年,全国大会での口頭発表の数も100件を超えるようになりました。この多様な研究活動の情報を学会全体で共有するためにも,『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』への会員の皆様からの,さらなる積極的な投稿をお待ちしております。

最後に,アンケート調査のお知らせとお願いです。次々号『音楽教育実践ジャーナル』vol.13no.２の特集「学習者の視点から学校音楽教育を考える」に合わせて,2015年４月,小学生,中学生,高校生を対象にWebアンケート調査を実施いたします。アンケートのURLは,学会ホームページ・トップ（http://日本音楽教育学会.com/）から入っていただけるよう,リンクを張る予定です。児童・生徒の皆さんやお知り合いへの周知など,皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

2-3 学会誌のあり方に関する検討委員会

検討委員会委員長　権藤　敦子

学会誌のあり方については，これまでにも，会長の諮問を受けた検討委員会や歴代の編集委員会によって検討され，その都度改善が図られてきました。2014年２月には，発刊後10年以上を経過したことに鑑み『音楽教育実践ジャーナル』検討委員会が立ち上げられ，７月にその性格やあり方，編集業務，編集方針等の見直しについての提案が行われました。しかし,『音楽教育学』も掲載率の低さという点で課題を抱え，投稿総数もやや減少気味であること，査読制度，編集委員会の役割，投稿論文の掲載率等の問題は両学会誌に関わる問題であることから，2014年10月，新たに「学会誌のあり方に関する検討委員会」が設置されました。有本真紀会員，伊野義博会員，今川恭子会員，永岡都会員，藤井浩基会員，本多佐保美会員，村尾忠廣会員，権藤の８名で構成され，委員の互選により委員長を権藤，副委員長を伊野委員が務めます。

本委員会は，現在の学会誌の本質的な課題について検討し，学会誌のあり方について将来的な展望をもって提案することを目指します。その際，①音楽教育学の特性をふまえて学会誌のあるべき姿を見定める，②研究・実践のそれぞれにとって有意義な学会誌にする，③質を落とすことなく掲載率を高めるための手立てを検討する，④「光るもの」があれば掲載できるような採択審議と編集の方法を考える，⑤会員の立場に立ち，信頼関係にもとづくコミュニケーションを重視する，という前提に立ちます。12月23日，２月22日に開催した２回の委員会では，これまでの経緯と課題を，過去10年を目安に収集したデータに基づいて分析・協議しました。今後は下記６項目を中心に検討を行い，５月に中間報告を行う予定です。

（１）学会誌２誌の機能と発行回数の見直し
（２）音楽教育学の学的性格をふまえた掲載決定方法の改善
（３）投稿誌・研究交流のための『音楽教育学』の環境整備
（４）実践交流のための『音楽教育実践ジャーナル』の環境整備
（５）編集業務の改善
（６）学会誌の予算と編集経費・電子化事業

ご意見がありましたら，４月15日（水）までに下記アドレス宛，会員番号と名前を添えてお送りください。郵送の場合には，学会事務局宛の表書きに「学会誌のあり方に関するコメント」と朱筆で明記してください。

onkyoiku.pubcomm@gmail.com

３ 音楽教育の窓

3-1 〈連載〉音楽・教育・学校（３） 自分史と音楽教育――戦後 70 年を振り返る――

丸山 忠璋（武蔵野音楽大学）

今年は戦後 70 年にあたるという。1943（昭和 18）年生まれの私にとっては，自分の生きてきた時間とほぼ同じ長さになる。つまり私の受けてきた教育が戦後の音楽教育の歴史ということになる。

長野県北安曇郡白馬村（…先日，地震で被害のあったところ）の小学校に入学した。９月に担任の先生が私にヴァイオリンを習うように奨めてくれた。親も承諾してヴァイオリンを購入し，私は毎日それを抱えて登校し，放課後一人で練習したあと，先生に見ていただいてから帰路に着いた。先生ご自身はヴァイオリンを弾かれなかったので，私は自分で楽譜を判読しながら進めなくてはならなかった。レコードもテープも周りにない時代…おかげで読譜力が身に付いた。そして３月，一人だけ６年生に混じって卒業音楽会に出させていただいた。

もうひとつ，秋の運動会で，遊戯のときの歌をうたうように言われた。つまりレコードの代わりに先生の弾くオルガンに合わせて独唱せよということで，練習のときには毎度，そして運動会当日はマイクの前に立って黄色い声を張り上げた。〈ぎんぎんぎらぎら夕日がしずむ…〉〈ゆりかごの歌をカナリヤがうたうよ…〉。その役は村人の注目を集め，私も得意満面だった。そんなこんなですっかり音楽のとりこになった私は，その後も音楽から離れることはなかった。

２年生になるときに転校，松本で鈴木鎮一が始めていた才能教育研究会に入学し，中学１年生まで続けた。この時期，学校でも耳にすることの少なかったヴィヴァルディ，バッハ，モーツァルトなどの音楽に触れられたことは一生の財産となった。「音を磨き，センスを身に付けることが人を育てる」という鈴木先生の言葉を座右の銘として，毎日練習に取り組んだ。

高校時代には音楽部の弦楽合奏でチェロを弾いたり，混声合唱の指揮を務めたりと音楽漬けの毎日だった。当時は楽譜をガリ版刷りで作らなくてはならず，徹夜作業も結構したが，それによって音の使い方をしっかり頭に入れることができた。高３になる頃，音楽の道に進もうと決めて，学校のピアノで練習を始めた。音楽の先生が無料で見てくださるというのでご自宅にうかがったが，大抵酔って帰ってこられてレッスンにはならなかった。

この時代，音楽の授業といえば歌をうたうことぐらいしか経験できなかった。楽器も鑑賞用機材もほとんど整っていなかったからである。しかし私はたくさんのことを学べたことをしあわせに思う。

卒業後，自転車で東京芸大まで行き，先輩に「音楽に進みたいがどうしたらいいか」と相談したところ，「田舎にいてできるのは歌ぐらいしかない」との助言を受けて声楽の勉強を始めた。３年後に東京芸大に入学，続いて新潟大学の教育専攻科で音楽教育を学んだあと，長野県の高等学校の教員になった。戦後 25 年を経た 1970 年であった。

その後は，高等学校の教員を 14 年，東京都教育委員会（教育庁指導部）を４年，文部科学省（教科書調査官）を８年，大学で 19 年間，音楽教育にかかわってきた。その間の大きな仕事を挙げよと言われれば，世界の諸民族の音楽を導入したことであろうか。1980 年（戦後 35 年）当時，音楽教育では西洋音楽以外ほとんど顧みられていなかった。しかし，1989 年（戦後 44 年）平成元年の学習指導要領では，日本の伝統音楽とともに民族音楽が大きく取り上げられ，今日ではどの音楽教育研究会を覗いても，当たりまえのように「世界の音楽」「日本の音楽」の授業の研究発表が行われており，自分が取り組んだ頃と比べて隔世の感がある。同時に世の中を変えるには 30 年くらいかかるものと知った。

昨年７月の ISME 世界大会（ブラジル）に筆者も国内委員として参加した。世界 25 カ国あまりから 400 名ほどの参加者があり，演奏や研究発表など活発な交流が行われた。「世界のさまざまな音楽に耳を傾けよう」と題した本大会を通してとくに印象に残ったのは，今日ますます世界の国々がたがいに影響しあって，それぞれの国の音楽文化を形成している姿と，研究発表で CMA（地域音楽活動）に触れたものが多く見受けられた点であった。

次世代を担う子どもたちには，どんな音楽経験を与えたらよいのだろうか。30 年後（戦後百年）を目指してみんなで考えてゆきたい。

４ 会員の声

4-1 号泣する準備はできていなかった

玉村　恭（上越教育大学）

ときおり大学で自主ゼミナールを行う。日本の伝統音楽や諸民族の音楽について，授業時間内の「説明」だけでは物足りなく感じられることがあるので，有志の学生と一緒に時間を見つけて実演を鑑賞したり実際に演奏してみたりしている。

その時は能をやっていた。せっかく足袋を用意したのだから，短い仕舞を一つ覚えて舞えるようにしたらという，私の提案にのった学生数名による自主稽古である。

ある学生Aが《熊野》(ゆや) という曲に取り組んでいた。どちらかといえば器用な方ではなく，決められた手順，指示されたとおりをこなすので精一杯という感じであった。映像や教材を頼りに懸命に動きを追っていた。自分が稽古を受けた時の記憶をたどって私も助言をした。

不思議なことが起きた。ある場面に来てAが「決めのポーズ」を取った時，別の人の姿が重なって見えたのだ。Bさんという，学生時代に一緒に稽古に励んだ私の後輩である。

私は学部３年生の時に能楽サークルに入り，謡と舞の指導を受けた。しょせんはサークル稽古であるが，師匠はたいへん熱心に指導してくださった（私が卒業してほどなく急病で亡くなられた。まだお若かったのに残念である)。

同意してくれる人も多いと思うのだが,同じ師匠に教わってそれなりの修練を積むと,似た「気」を帯びるようになる。自主ゼミに取り組むAから感じられたのは，Bさんや他の先輩・後輩たちと同質のそれだった。むろんAはまったくの初心者，Bさんと面識のあるはずもない。こういうことがあるのだな，と思った。

「伝承」というのは不思議なものである。一般にそれは，人から伝えられたものを別の人に伝えることである。これはたいへん難しい。まず自分がきちんと伝承を受けなければならない。自分にきちんと「伝えられた」ことを確認してからでなければ，それを次の人に「伝える」ことはできない。

だが，考えてみればこれはおかしい。いちいち確認などしていたら伝承は成り立たない。そもそも，あるものが自分に伝わったか伝わっていないかを判定するのはほとんど不可能である。自分の姿を自分で見ることはできない（鏡などという野暮なことは言うまい)。それなのに，どうして師匠の姿と自分の姿が同じだとか違うとか言えるのか。

こういうことではないか。人は自分に何事かが伝わったことを確認してからそれを次へと伝える，のではない。逆である。人に何かを伝え（てしまっ）た時，その人の姿を見て，自分が人に何かを伝え(てしまっ)たこと,自分に伝えるべき何かがあったことがはじめてわかるのである。

違うかもしれない。あらゆる「伝承」活動がそのように説明できるなどと豪語する気は(今のところ）ない。それでも,「芸」が「伝わる」ということの奥深さを感じさせる出来事ではあった。

4-2 ハンガリー国営TV制作

ドキュメンタリー番組「五音階の国・核―福島コダーイ合唱団」

降矢　美彌子（宮城教育大学名誉教授）

ハンガリー国営TVは，筆者と福島コダーイ合唱団のドキュメンタリー番組「五音階の国・核―福島コダーイ合唱団」を制作，2014年11月2日，ハンガリー全土で放映し，大きな反響があった。福島での取材は，８月６日から15日まで，福島市，いわき市，南相馬市，金沢市で熱心で真摯な取材を行い，更に19日まで東京などで取材を続けた。

番組は,「PentAtom―福島コダーイ合唱団」というタイトルで，１時間８分の長時間番組。PentAtomとは造語で，音楽では，五音階の伝統をもつ日本のことを五音階の国と呼び，原発事故の象徴である核という言葉を使って,「五音階の国・核」という造語のタイトルをつけた。60時

写真１　*Mi is a szó*《言葉とは何》演奏収録の様子

間をゆうに超える取材映像を，芸術性高く，同時に世界に原発事故の恐ろしさを深く静かに伝える感動的な美しい映像へと仕上げている。番組には，全編にバルトーク，コダーイ，クルターグ作曲の 15 曲の合唱曲といわきに伝わる《じゃんがら念仏踊り》，ピアノ演奏が流れる。2011 年 3 月 11 日の地震・津波によって，福島第一原発で３基の原発が事故を起こした福島は，未だ，収束へ向かえずにいる。しかし，福島の原発事故は，日本ではもう風化しているという意味で悲劇的である。番組は，放射能被災地の福島の今を生きる福島コダーイ合唱団員と飯舘村からの被災者，降矢へのインタビューによって構成されている。それは，福島から，音楽を愛する心とともに，福島の今，未だ収束へ向かわない原発被災地の福島を世界に発信するという意味で，震災以来の福島からの発信としては，初めてのものだった。ハンガリーの著名な音楽家，クルターグ・ジェルジュ，セーニ・エルジェーベトなど多くの音楽家から圧倒的な感銘を受けたとコメントがあった。

番組は，ハンガリーの人々の国民的な愛唱歌，コダーイ作曲《夕べの歌》で始まり，《夕べの歌》で終わる。この曲は，他国支配の長かったハンガリー人の独立を願う人々の辛さや願いや祈りでできている。それは，場所や境遇は異なるが，事故を起こした原発事故の廃炉には数十年とも 100 年以上かかるとも言われ，３年９ヶ月余の歳月を経ても，廃炉の作業にも取り掛かかれていない福島の苦しみや祈りを象徴していると思われたのだった。いわきや南相馬の被災地の荒涼たる映像には，バルトークの《この世にただ一人の私》やクルターグ作曲，サミュエル・ベケット詩による言葉の虚しさを歌う《言葉とは何》が流れた。

福島コダーイ合唱団員で，放射能の被災地でもある南相馬に事故直前に新築の家の棟上げ式を終えた団員は，事故後，何の情報もない中で，３人の子どものために新潟県の新発田に避難し，３年間の避難生活を送った。彼を支えたのは歌，事故後すぐ頭に浮かんだ歌が本間雅夫作曲《八月の歌》だったと語った。《八月の歌Ⅳ―語り伝えよ―》（作詞　青木渡）は，広島の原爆を歌った歌で，福島コダーイ合唱団は，1996 年アムステルダムで行われた ISME の世界大会で初演した。

二人の子どもを抱え，少しでも安全な会津に子どもを避難させたかったと語る団員は，しばらく，会津から片道 100ｋｍを超える通勤に耐えたが，家族の分断という問題の中で，結局，放射線量の高い福島市内に留まって生活を続けている。歴史上ない放射線による被災は，福島の人々，とりわけ，帰還困難区域にから仮設に避難している被災者，県外避難者，福島コダーイ合唱団員の心と生活を蝕み続けている。原発のもつこの原罪を，美しい音楽とともに深く静かに発信するドイキュメンタリー番組が，合唱の国ハンガリーで制作・放映された意義は大きい。全世界の人々に届けられることを希望したい。

番組の中で演奏された作品は，以下である。合唱は，福島コダーイ合唱団，指揮・ピアノは，降矢美彌子である。バルトーク作曲『児童と女声のための合唱曲集』から，《ここに置き去りにしないで！》，《この世にただ一人の私》，《パン焼き》，《軽騎兵の歌》，《さまよい》，《女の子からかい歌》，《悔み》，《神様がともにおられますように!》。コダーイ作曲『児童と女声のための合唱曲集』から，《夕べの歌》，《ナジサロンタ地方の命名日の祝歌》，《美しき悲願》。山城祥ニ編曲宮崎県民謡《刈干切唄》。クルターグ作曲《言葉とは何》。ピアノは，クルターグ作曲《人　花・・・ミヤコへ》，ベートーヴェン作曲《ピアノ・ソナタ嬰ハ短調　１楽章》。なお，中学生が 10 年余バルトーク作曲『児童と女声のための合唱曲集』を歌い続けている粕谷雪子指揮による金沢市立野田中学校合唱部のバルトーク作曲《家畜多産のおまじない》も収録された。

写真２　団員へのインタビュー収録の様子

５ 新刊紹介

5-1 『小学校音楽映像指導資料　楽しく実践できる音楽づくり授業ガイド』

津田　正之（国立教育政策研究所）

小学校音楽科の表現領域は，歌唱，器楽，音楽づくりの３分野で構成されています。これらはどれも大切ですが，音楽づくりについては，音楽づくりの授業を経験していない教師が多いことや，具体的な指導法や活動における子供の姿をイメージしにくいことなどから，指導が難しい内容となっており，音楽づくりの授業が必ずしも効果的に行われていない状況が散見されます。

こうした状況を踏まえて，文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センターでは，小学校音楽科の表現領域である音楽づくりの授業の更なる充実に資するため，本指導資料を作成しました。音楽づくりの指導のポイントや留意点などについて，全国各地の優れた取組を具体的に紹介した映像資料です。主な特徴は次の通りです。

○低学年・中学年・高学年の音楽づくりの事例を４事例ずつ，計12事例収録
○映像事例の「概要とポイント」「指導計画」「映像内容の構成」をまとめた解説書付
○音楽づくりの指導過程を映像で分かりやすく紹介するとともに，具体的な指導場面をクローズアップ
○指導上の留意点や子供の表現のポイントなどをテロップや授業者へのインタビューを通して明確化
○身近で多様な音素材（声，手づくり楽器，ボディパーカッション，鍵盤ハーモニカ，リコーダー，和楽器）を扱う実践を紹介
○低・中・高学年の各巻に，「我が国の音楽」を学習素材とした事例を紹介
○共に学び高め合う協働的な学習場面を多数紹介

本指導資料は，作成協力者の先生や本研究所職員の方々など多くの皆様の協力を得て作成されました。小学校の事例を収録したものですが，幼児教育，中学校，高等学校，教員養成，社会教育などの現場においても参考となる内容になっていると思います。今後，各都道府県市教育委員会等による研修会，教員養成系大学の授業などにおいて本指導資料が有効に活用され，音楽づくりの授業が効果的に展開されることを期待しています。なお，国立教育政策研究所ホームページにおいて，音楽づくりＱ＆Ａ，指導案などの情報を提供する予定です。

文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター・制作　学事出版　2014年12月発行
各巻（低学年・中学年・高学年）3,000円（税別），全巻セット箱入り9,000円（税別）
ISBN 978-4761921071

６ 報告

6-1 平成 26 年度第４回常任理事会

日　時：平成 27 年２月 22 日（日）15:00～17:00
場　所：立教大学 12 号館第３会議室
出席者：小川，伊野，本多，加藤，北山，権藤，佐野，嶋田（記録），中地，三村
小川会長の挨拶に続き，本多事務局長より 2014（平成 26）年 10 月 24 日以降の会務報告がなされた。

【会務報告】〈2014 年 10 月 24 日以降〉

2014 年	10 月 25，26 日	日本音楽教育学会第 45 回大会（聖心女子大学）
	10 月 25 日	平成 26 年度総会（聖心女子大学）
	12 月 21 日	名簿作成のための個人票発送作業（事務局）
	12 月 23 日	学会誌のあり方に関する検討委員会（聖心女子大学）
	12 月 24 日	『音楽教育学』第 44 巻第２号，ニュースレター第 58 号発送
	12 月 28 日	会長諮問プロジェクト会議（学習院大学）
2015 年	２月 11 日	選挙管理委員会（事務局）
	２月 15 日	平成 26 年度第４回編集委員会（立教大学）
	２月 22 日	学会誌のあり方に関する検討委員会第２回（立教大学）
		会長諮問プロジェクト会議第２回（立教大学）
		平成 26 年度第４回常任理事会（立教大学）

【会計報告】

１．第 45 回大会（東京大会）会計報告（今川→本多）
下記のとおり，報告がなされた。

第 45 回大会決算書

収入の部　（単位：円）

費　目	金額（円）	備　考
大会本部経費	700,000	学会より
出展料	230,000	12社
広告料	279,352	10社
臨時会員参加費（両日）	200,000	5,000×40名
臨時会員参加費（1日）	225,000	3,000×75名
臨時会員参加費（学部学生）	13,000	1,000×13名
懇親会参加費	604,000	4,000×151名
利息	43	
収入合計	2,251,395	

支出の部　（単位：円）

費　目	金額（円）	備　考
懇親会費	535,113	
大会実行委員交通費	32,130	
弁当	92,556	
シンポジスト・パネリスト謝金	120,000	
シンポジスト・パネリスト交通費	19,000	
大会備品・消耗品費	43,459	
アルバイト謝金	793,100	ホームページ作成・管理、準備事務作業、当日アルバイト、記録作成補助を含む
学内清掃	10,800	26日（日）のみ
会議費	1,101	
郵送費	4,838	
雑費	10,144	
学会本部への返金	589,154	
支出合計	2,251,395	

２．平成 26 年度会計中間報告（杉江・佐野）
資料に基づき，今年度会計の見通しについて予算額から突出して赤字になる項目はない旨の報告があった。会長諮問プロジェクトに関する費用は今年度は予備費から支出する方向で検討された。

【審議事項】

１．第 46 回大会について

（１）大会実行委員会（菅→本多）　▸２頁参照

すでに実行委員会が組織され，第１回の実行委員会が開催されたこと，HP も立ち上がり，会場利用計画表も作成された旨が報告された。

（２）企画担当理事　ープロジェクト研究ー（加藤・嶋田）

昨年からの継続研究をプロジェクト研究Ｉとして実施する。新規プロジェクト研究については昨年度のプロジェクト研究Ｉとの継続性も考慮しながら企画する予定である旨が報告された。

（３）大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き（本多）

資料に基づき，覚え書きの趣旨の説明がなされ確認を行った。

（４）研究発表応募要領（本多）

資料に基づき説明があり，応募締切を６月 21 日（日）午後８時とすることが承認された。さらに「共同企画」「口頭発表」ともに，希望曜日の指定はできないが，公務の理由に限り発表日の希望がある場合は申込専用の Web ページの備考欄に記入できることが確認された。また，氏名や発表タイトルで Web ページのシステム上，入力ができない文字がある場合はその旨を備考欄に記入してはどうかとの提案がなされ，検討することとなった。「研究発表にあたってのお願い」文書も確認された。

（５）共同企画について（本多）

昨年の共同企画申込書に，音声出力に関する項目も含めた PC 使用希望の有無を問う欄を設けることが承認された。

２．第 47 回大会について（小川）

横浜国立大学において順調に準備が進んでいる旨が報告された。

３．平成 27 年度ゼミナールについて（佐野・水戸）　▸２頁参照

内容の詳細について決定次第，常任理事会および理事会 ML で発信し，ニュースレターに掲載すること，また３月下旬に HP も立ち上げの予定である旨が報告された。

４．シニア料金の検討（本多）

今年度の大会総会で出された会員からの検討依頼に基づき，他学会の制度も参考にしつつ検討を行ったが，会計全体への波及，会員の権利の平等性を担保する等の理由によりシニア料金は設定しないこととなった。

５．新入会員及び退会者について（本多）

資料に基づいて説明があり，新入会員（正会員）８名，新入会員（学生会員）１名，退会者 18 名について承認された。

◇正会員　新入会（2014 年 10 月 24 日理事会以降）：８名

◇学生会員　新入会（2014 年 10 月 24 日理事会以降）：１名

【2015 年２月 22 日現在　　正会員数 1,543 名　学生会員数　１名　特別会員数１名】

６．その他

（１）両学会誌投稿規定における会員の資格等について

『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』の投稿資格記載における新入会員の扱いについて検討を行い，『音楽教育学』の投稿資格を『音楽教育実践ジャーナル』と同様にすることが承認された。なお，一部文言の検討を行った上で修正案を５月の理事会に諮り，10 月の総会で報告する予定である。

（２）大会の輪番について

資料に基づき，平成 29 年度は東海・北陸地区での開催が承認された。

【報告事項】

１．学会誌のあり方に関する検討委員会（権藤）　**▸４頁参照**

将来的な展望を持って学会誌のあり方を検討することを骨子として，質を落とさずに掲載率を上げる方向でこれまでに２回(12 月 23 日，２月 22 日）の対面会議およびメール会議を行ったこと，４月 15 日を期限として会員からの意見を求めつつ検討を進める予定であることが報告された。

２．会長諮問プロジェクト（小川・加藤）　**▸３頁参照**

12 月 28 日および２月 22 日に２回の会議を行ったこと，及び以下の２項目についての経過報告がされた。

（１）質問紙調査の実施

小学校６年生（330 名）を対象とした質問紙調査を行い，これまでの回答を検討した結果，もう少し大きな規模での再調査の必要が認められ，今後，小学校に加え中学校にも同様の内容の質問紙調査を実施しデータ収集を行う予定である。データの分析結果を学習指導要領実施状況報告の調査結果等と比較検討しながら学会としてのまとめを行い，その成果を 11 月中にシンポジウム等の場で公開予定である。なおシンポジウム等については関連学会や全日音研部会とも連携を図りながら企画する。

（２）座談会の企画

教育行政や他教科の関係者等による「教科音楽で培われる力」(仮) に焦点をあてた座談会を，関東地区例会との同日開催となるように６月実施の方向で企画する。その成果は「常任理事会企画プロジェクト研究Ⅱ」の一部として第 46 回大会で報告する。

（３）その他

研究成果を社会に発信していく方策として書籍刊行や Web を有効活用した発信方法などの検討課題が確認された。なお，会長諮問プロジェクトに係る費用に関しては平成 27 年度予算に組み込む方針である。

３．各委員会報告

（１）編集委員会（三村）　**▸４頁，12 頁参照**

２月 15 日に第４回編集委員会を開催し，編集に関する審議のほかに，投稿者の論文修正に関して意見交換がされた旨の報告がなされた。また外部査読者への謝金の検討の必要性が提起されたとの報告を受け，常任理事会では他学会の状況を調査しつつこの件を継続審議することが承認された。

（２）国際交流委員会（水戸）

委員会から 2016 年２月に実施予定であった国際セミナーの延期が提案されたが，平成 27 年度内実施を目指して再度検討を依頼することとなった。

（３）広報委員会（権藤）

ニュースレター第 59 号の３月上旬入稿予定の報告と執筆予定者への依頼がされた。

（４）選挙管理委員会（志民→本多）　**▸３頁参照**

２月 11 日に委員会が開催され，志民一成委員長，駒久美子副委員長が選出された。

（５）音楽文献目録委員会（木間→本多）

12 月 20 日に開催された委員会の報告･審議事項を資料として提出された議事録により確認した。

４．名簿作成について（本多）

１月末までに返却された個人票をもとに，情報のチェックとデータベースへの打ち込み，および校正作業に入ることが報告された。

５．その他

（１）事務局の体制について（本多）

ホームページ担当の事務局員の長山弘氏の退職，および窓口担当の坂本友里氏の退職予定に伴い新しい局員の人選に入る旨の報告がされた。

＊ 平成 27 年度第１回常任理事会　５月 17 日（日）14:00～15:00（予定）　於　立教大学
平成 27 年度第１回理事会　５月 17 日（日）15:00～17：00（予定）　於　立教大学

6-2 平成 26 年度第４回編集委員会 ▸４頁参照

平成 26 年度第４回編集委員会は, ２月 15 日（日）立教大学にて開催された。報告事項, 協議事項は以下の通りである。

（1）『音楽教育学』第 45 巻第１号と『音楽教育実践ジャーナル』vol. 13 no. １の進捗状況の報告と確認。編集作業は順調に進められている。

（2）投稿原稿の採否について :『音楽教育学』への投稿は論文３本, 論考３本, 報告１本で, 審議の結果, 論文１本と報告１本が「採択」, 論文１本が「再査読」, 論文１本と論考３本が「不採択」となった。また,『音楽教育実践ジャーナル』への自由投稿は, 論文３本, 報告２本で, 審議の結果, 論文１本と報告１本が「採択」, 論文２本と報告１本が「不採択」となった。

6-3 会計報告

第 45 回大会時の総会で承認された会計報告と予算は以下の通りである。

平成25年度会計報告

Ⅰ 一般会計

収入 科目	予算	決算
前年度繰越金	5,197,433	5,197,433
正会員会費	10,619,000	10,430,000
次年度会費		
学生会員会費	4,000	0
団体会員会費	30,000	30,000
賛助会員会費	370,000	420,000
学会誌売上金	480,000	630,408
本誌代		573,020
送料収入		57,388
大会参加費	1,400,000	1,093,500
雑収入	20,000	832,307
大会実行委員会経費返金		646,467
例会運営費返金		169,415
雑収入		16,425
計	18,120,433	18,633,648

支出 科目	予算	決算
大会運営費	1,900,000	1,534,344
大会実行委員会経費	700,000	700,000
事務局経費	1,000,000	823,784
プロジェクト研究	200,000	10,560
学会誌費	2,900,000	2,883,195
音楽教育学発行費	1,500,000	1,472,700
実践ジャーナル発行費	1,400,000	1,410,495
ニュースレター費	320,000	309,552
例会運営費	600,000	601,900
通信・郵送費	1,000,000	938,511
会議費	20,000	20,428
旅費・交通費	1,700,000	1,193,590
翻訳費	10,000	0
事務局費	4,722,000	3,772,246
事務費	500,000	440,679
謝礼費	2,000,000	1,550,094
人件費	2,200,000	1,759,473
事務局員保険費	22,000	22,000
分担金	240,000	239,739
選挙積立金	200,000	200,000
セミナール基金	100,000	100,000
国際交流基金	100,000	100,000
研究出版基金	950,000	950,000
学会基金	100,000	100,000
予備費	3,258,433	109,465
小計	18,120,433	13,052,970
次年度繰越金		5,580,678
計	18,120,433	18,633,648

Ⅱ 研究出版基金　現在高　¥3,442,891（①-②）

収入	平成24年度までの積立金	¥2,964,104	
	平成25年度積立金	¥950,000	
	利息	¥517	¥3,914,621 ①
支出	雑誌ガイドブック	¥471,730	¥471,730 ②

Ⅲ 学会基金　現在高　¥2,199,214（①-②）

収入	平成24年度までの積立金	¥2,099,294	
	平成25年度積立金	¥100,000	
	利息	¥340	¥2,199,634 ①
支出	積高証明発行手数料	¥420	¥420 ②

Ⅳ ゼミナール基金　現在高　¥1,374,535（①-②）

収入	平成24年度までの積立金	¥1,327,837	
	平成25年度積立金	¥100,000	
	利息	¥196	¥1,428,033 ①
支出	平成25年度ゼミナール	¥53,498	¥53,498 ②

Ⅴ 国際交流基金　現在高　¥263,530（①-②）

収入	平成24年度積立金	¥163,490	
	平成25年度積立金	¥100,000	
	利息	¥40	¥263,530 ①
支出			¥0 ②

Ⅵ 選挙積立金　現在高　¥207,225（①-②）

収入	平成24年度までの積立金	¥386,046	
	平成25年度積立金	¥200,000	
	利息	¥49	¥586,095 ①
支出	第21期選挙運営費	¥378,870	¥378,870 ②

◎ 平成25年度決算を上記の通り報告いたします。

平成26年4月20日　会計担当　奥 忍

島崎 篤子

◎ 上記の通り相違ないことを監査いたしました。

平成26年4月20日　会計監事　伊藤 誠

杉江 淑子

平成26年度補正予算

Ⅰ　一般会計

収入	
科　目	
前年度繰越金	5,580,678
正会員会費	10,451,000
	7,000×正会員実数1493※
学生会員会費	4,000
団体会員会費	30,000
賛助会員会費	370,000
学会誌売上金	480,000
本誌代	
送料収入	
大会参加費	1,400,000
その他	20,000
大会実行委員会経費返金	
例会運営費返金	
雑収入	
計	18,335,678

支出	
科　目	
大会運営費	1,900,000
大会本部経費	*700,000*
事務局経費	*1,000,000*
ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ研究	*200,000*
学会誌費	3,000,000
音楽教育学発行費	*1,500,000*
実践ジャーナル発行費	*1,500,000*
ﾆｭｰｽﾚﾀｰ費	350,000
例会運営費	600,000
通信・郵送費	1,000,000
会議費	20,000
旅費・交通費	1,700,000
翻訳費	50,000
事務局費	4,722,000
事務費	*500,000*
人件費	*2,200,000*
事務局運営費	*2,000,000*
事務局員保険費	*22,000*
分担金	240,000
選挙積立金	200,000
ｾﾐﾅｰﾙ基金	100,000
国際交流基金	100,000
研究出版基金	100,000
学会基金	300,000
予備費	3,953,678
計	18,335,678

※正会員実数は2014年6月30日現在

平成26年度その他会計

Ⅱ　研究出版基金	¥3,542,891	
収入		
平成25年度までの積立金	¥3,442,891	
平成26年度積立金	¥100,000	¥3,542,89
Ⅲ　学会基金	¥2,499,214	
収入		
平成25年度までの積立金	¥2,199,214	
平成26年度積立金	¥300,000	¥2,499,21
Ⅳ　ゼミナール基金	¥1,474,535	
収入		
平成25年度までの積立金	¥1,374,535	
平成26年度積立金	¥100,000	¥1,474,53
Ⅴ　国際交流基金	¥363,530	
収入		
平成25年度までの積立金	¥263,530	
平成26年度積立金	¥100,000	¥363,53
Ⅵ　選挙積立金	¥407,225	
収入		
平成25年度までの積立金	¥207,225	
平成26年度積立金	¥200,000	¥407,22

平成27年度予算

Ⅰ　一般会計

収入	
科　目	
前年度繰越見込金	3,953,678
正会員会費	10,451,000
	7,000×正会員実数1493※
学生会員会費	4,000
団体会員会費	30,000
賛助会員会費	370,000
学会誌売上金	480,000
本誌代	
送料収入	
大会参加費	1,400,000
その他	20,000
大会実行委員会経費返金	
例会運営費返金	
雑収入	
計	16,708,678

支出	
科　目	
大会運営費	1,900,000
大会本部経費	*700,000*
事務局経費	*1,000,000*
ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ研究	*200,000*
学会誌費	3,000,000
音楽教育学発行費	*1,500,000*
実践ジャーナル発行費	*1,500,000*
ﾆｭｰｽﾚﾀｰ費	350,000
例会運営費	600,000
通信・郵送費	1,000,000
会議費	20,000
旅費・交通費	1,700,000
翻訳費	50,000
事務局費	4,722,000
事務費	*500,000*
人件費	*2,200,000*
事務局運営費	*2,000,000*
事務局員保険費	*22,000*
分担金	240,000
選挙積立金	200,000
ｾﾐﾅｰﾙ基金	100,000
国際交流基金	100,000
研究出版基金	100,000
学会基金	400,000
予備費	2,226,678
計	16,708,678

※正会員実数は2014年6月30日現在

平成27年度その他会計

Ⅱ　研究出版基金	¥3,642,891	
収入		
平成26年度までの積立金	¥3,542,891	
平成27年度積立金	¥100,000	¥3,642,89
Ⅲ　学会基金	¥2,249,214 ①ー②	
収入		
平成26年度までの積立金	¥2,499,214	
平成27年度積立金	¥400,000	¥2,899,21
支出		
名簿作成費	¥600,000	
学会賞	¥50,000	¥650,00
Ⅳ　ゼミナール基金	¥1,274,535 ①ー②	
収入		
平成26年度までの積立金	¥1,474,535	
平成27年度積立金	¥100,000	¥1,574,53
支出		
平成27年度ゼミナール補助金	¥300,000	¥300,00
Ⅴ　国際交流基金	¥463,530	
収入		
平成26年度までの積立金	¥363,530	
平成27年度積立金	¥100,000	¥463,53
Ⅵ　選挙積立金	¥207,225 ①ー②	
収入		
平成26年度までの積立金	¥407,225	
平成27年度積立金	¥200,000	¥607,22
支出		
第22期選挙運営費	¥400,000	¥400,00

７ 事務局より

事務局長　本多　佐保美

１．第 46 回大会に関するお知らせ

第 46 回大会は，10 月３日（土）・４日（日）に宮崎にて開催予定です。多数のご参加をお待ちしております。研究発表をご希望の方は，同封の応募要領をよく読んでお申し込みください。なお，研究発表に関する情報は，随時学会ホームページ上でお知らせしていきます。

２．会費納入のお知らせ

年度会費の納入をお願い致します。納入期限は５月 31 日です。期限内に会費を納めなければ，その後の送付物，研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。なお，２年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。

３．名簿作成について

2015 年 10 月発行（12 月発送）予定で，名簿作成を計画しております。すでにお送りしております「名簿掲載のための会員情報確認票」をまだお手元にお持ちの方は，すみやかに事務局まで返送をお願い致します。円滑に名簿発行作業をすすめるため，ご協力のほどよろしくお願い致します。

４．バックナンバーの販売について

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。詳しくはホームページをご覧ください。

◆事務局開局時間

月・水・金　9:00～15:00

E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp　　FAX：042-381-3562

◆事務局員

窓口担当：亀山さやか・坂本友里

……【編集後記】……

本誌第 59 号が皆様のお手元に届くのは，西から桜の便りも聞かれる頃でしょうか。冬の寒さから，梅へ，桜へ。春へと向かう喜びを感じる一方で，３月 11 日には東北地方太平洋沖地震の発生から４年目を迎えました。当時，幼稚園や保育園に通っていた子どもたちの多くが小学生になったとのこと。時の流れの速さを感じると共に，被災地からは未だに進まぬ園舎復興のことなども聞いております。

さて，2014 年４月より学会も新体制となり，広報委員会内でも，ニュースレターの内容について様々な議論が交わされました。新たな試みとしては，例えば，「音楽教育の窓」を新設し，各学会，研究会情報の発信や参加記に加え，「音楽・教育・学校」と題した特集連載を行っております。第３回になる今号では，全日音研大学部会長でもある丸山忠璋会員にご執筆いただきました。次号以降も，国内外で開催される学会・研究会の情報や参加記，エッセイ，新刊紹介，ご意見，ご感想など，皆様からのご投稿をお待ちしております。（長井覚子）

投稿先アドレス☞　**onkyouiku.kouhou@gmail.com**

……

【日本音楽教育学会事務局】
所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206
TEL&FAX：042-381-3562　E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp
私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26　＊郵便物は私書箱へ
開局日：月・水・金
開局時間：9：00～15：00